

《1月例会報告》

全面教育学の大きな山脈 柳田国男

index

1. 向井吉人： 認識とフィールドの系譜
2. 小田富英： 地名学習の進めと研究会の案内
3. 山田 学： 提唱・人間社会規範
4. 滝北利彦： ゼミ生達と取り組んだ「アクティブ福祉 in 町田 2014」
5. 伊東 峻： ことわざ学習も一歩から
6. 徳永忠雄： 間とは何か
7. 庄司和晃： 私の研究遍歴 第5期 柳田民俗学研究時代

(発表順)

私の研究遍歴

第5期 柳田民俗学研究時代

庄司和晃

柳田国男の影響

この日、庄司先生の研究遍歴は第5回を迎え柳田と庄司先生の関係が明らかになった。先生曰く「僕から柳田をとっちゃったら独創的な学はほとんど消えてなくなっちゃう」というくらい先生にとって柳田国男の影響は大きい。(研究遍歴)前半の山場であるとも言われた。それは例えば仮説実験授業の立ち上げにも大きな影響を与えたようだ。

柳田の編纂した『総合日本民俗語彙』の子供の遊びや会話の影響やはいまわり経験

主義などから庄司先生は「間」を意識したという。つまり、板倉聖宣さんの理論と子供のあいだを取り持ったのが庄司さんなのだ。そうでなければ生きた子供の声を掬い取る手法は生まれなかったに違いない。

板倉さんは、庄司先生がてつきり理科教師だと思っていたそうだが、そんな規格には収まりきれなかった。時には道元が出てきたり柳田の影響があったりしてまさにヌエ的であった。このことこそが学問をふくらませやがて三浦さんの触発を経て三段階連関理論へとつながっていく。

「全面研には柳田がある、というのは重要なことでこれは大きな柱である」という。「これは遺言である」といいたい、とも強く言い切った。さらに庄司先生は、柳田の残した学問を学習の場に生かすことを誰か

が継承してくれないか、地名でもいいしほかでも実践を出して行って欲しいとも言われた。「これは今日の結論といってもいいです」と。見事な言いきりであった。

柳田の学問には大きな魅力があるとすると庄司先生は、それを不思議という表現で言いかえる。たとえば文体からしてふしぎというように。西洋の学問をした人には読み切れない。

それはとりとめがない表現だからなのだが教材として素材がたくさん眠って豊かであるという。その影響か、庄司先生にはひらめきが多くあるという。

戦後において柳田の評価には浮き沈みがあり教育界ではあまり評価されなかった。そこをいち早く注目した結果、現在の柳田教育学の評価につながっていると庄司先生は自負する。

その学問の深さを思うと柳田教育学というよりも柳田人間学といったところまで掘り下げていかないと単なるエピソードに終わってしまうという。

この日、庄司先生は柳田国男を久しぶりに熱く語った。もっと時間があればいいと思うくらいに。時計は予定時間を1時間過ぎ6時をまわろうとしていた。用意されたレジュメは、A 3サイズで30枚を超えていた。



柳田の晩年を身近に知ることのできるエピソードは次々として出てきた。学术界に必ずしも受け入れられなかった柳田、仏教界や多くの共産主義者からも距離を置かれた柳田、

その学問を「バタ臭くない」と表現した。

我々はあたかも学問が最初から西洋に端を発していると思いがちだ。体系とか論理とか哲学という言葉がいかにも西洋から招来されたものだからだろうか。しかし柳田は同じような質の考え方を日本人の大衆の知恵の中から見つけ出しているのだ。彼自身は西洋の学問を熟知しているにもかかわらず。

その文章の雰囲気は日本人であれば誰にも見覚えのある感覚を帯びている。その中からコトワザに着目したのは庄司先生だ。コトワザには論理も哲学も内在していた。柳田はそれに気付き、庄司和晃はそれを三浦さんの影響もあって体系化理論化した、といえる。

さらに先生は、科学一辺倒になりやすい西洋の学問を相対化し前科学的段階、非科学的段階という枠組みを提示させてみた。

『科学ばかり主義の克服』の登場だ。

科学主義者でもある三浦つとむには分からなかった柳田の魅力が庄司先生に分かったのは、日大で宗教学を学ぶ中で「日本人の靈魂観」というテーマを持っていたからだったとこの日の話を聞いていて確信した。それは寺に生まれてなおかつ日本の精神性である神道を意識していたからに違いない。

柳田国男の『年中行事図説』をもとに庄司先生は『お祭り十二月』(1957)を出版した。あとがきに柳田からの引用がある。

そこには「子供には子供のもののあわれがある…」という印象的な文章だ。

京都学派、今西錦司らは『孤猿随筆』などから影響されたという。それは、生き物を人のように見る、人がましく見るという視線を共通に持っていたからだと庄司先生は言う。

それはまた柳田の個性ではなく、柳田自身が前代の人々から発見したものなのだ、ということだろう。

前回から庄司先生が何度もいう「間の思想」はこのことを指している。物事を全体から見たり相対化したりするもの見方だ。

この日庄司先生は柳田国男に対して「先入観がなかったから良かった」と何度も語られた。

日本人の多くのバタ臭い学者がやろうとしてもできなかった柳田国男からの学問作りを成し遂げたのは庄司和晃であり、柳田は庄司先生によってよみがえったとっていいだろう。

学校教育に風穴を開けた 認識とフィールドの系譜

向井吉人

現役を退いてから5年以上経つ向井さんだがその研究意欲は衰えを見せない。そのフィールドとは教育現場に携わる目を持ってメディアに素材をもとめ、結果的に研究思考に至るものでそこから見事に学校教育の相対化がなされた。フィールドとのつながりを何よりも大切にしてきた向井さんが、自らたどってきた足跡を「認識とフィールドの系譜」と銘打ってまとめたものを読むとなるほどと思わせる。(別紙資料)

庄司先生曰く「向井遺産目録」ですね、と。その向井遺産の原点は子供時代のまねごと遊び「学校ごっこ」にあるらしい。このエピソードに一同にやっとならしたが根っからの先生なのだ。

向井さんは自らの特徴的行為を「層状的思考」「粘菌的思考」と銘打つ。それは様々な事象や素材を次から次へと関連づけていく手法であり、その粘っこさが粘菌的思考ともいえる。まさに首肯するばかりだ。

野次馬的でありおもしろがりやであり、サービス精神旺盛な過剰な流儀をその手法

の特徴とおくことで一つの生きるスタイルを子供の前に表現してきたといえる。

わからない子がいてもいい、みんなにわからせる必要はないというスタンスは、自然であり子供たちにも十分伝わる。むしろわからないけどおもしろいという印象が消えずに成長した子供たちと再び会えるのではないだろうか。

何よりも向井さんは子供を一人の人間として扱っていることは間違いない。

提唱・人間社会規範

山田 学

これからは教育力の世の中ではないか、その意味で期待するのは全面研ではないかという山田さんだが、この壮大なタイトルから訴えたいのは何だったのかも一つ一つかみにくい。

例えば「人間社会をひとつの〈健康平和現実認識協同〉へ組織していく。さういう未来協同すなはち未来にある協同へ組織していく。」ということはどういうことなのか。尾崎さんのいうとおり「具体的なものが見えない」のである。

庄司先生は、「たとえば、…というように、というところが、止揚というがどう止揚したのか、家族というが家族とは何なのか…和み合うものがないなあ」ということで「今度ぜひ山田さんに（教育について）講義してもらったいいのでは」ということになった。具体的なことが見えてくることに期待したい。

地名教育の立ち上げ

小田富英

作新学院を辞した小田さんが地名研究所の『地名と風土』の編集長に就任するという。地名研究所は故谷川健一氏が主宰してきたものだがその後を谷川彰英氏が継承し新しい地名研究が始まるという。

地名に人々の歴史性を見いだしたのは柳田国男でその背後に意識されたのは「人口と移動」であると小田さんは言う。

現在の大都市一極集中と異なり、近世までは港町や交通の要所はもとより人々が住んでいる全国各地の集落に様々な移動が行われていた。それは通商であつたり出稼ぎであつたり、またあるときは転封であつたり様々であつた。

地名は名付けであり、その背後には産業や文化の痕跡が見える。

地図学習や防災学習を含め民俗学的アプローチの地名学習研究に期待したい。

* * *

地名学習研究会

日時：4月18日（土）

場所：筑波大学文京キャンパス

地下鉄丸ノ内線茗荷谷駅より徒歩
2分

* * *

ゼミ生達と取り組んだ 「アクティブ福祉in町田2014」 振り返りレポート

滝北俊彦

前回の続編で「アクティブ福祉 in 町田2014」での発表の様子を映像を中心に発表してもらった。

介護の現場では利用者の方達とどうコミュニケーとしていくかが大きな課題で、滝北さんのゼミ生等の発表はそこをきちんと切

り込んでいたのだが、審査員受けしなかったという。発表も三段階理論を上手に踏襲し分かりやすいのだが、どうやら科学的根拠や数値化した学際的なものが受けるようで、自分の介護観の背骨を表現したという滝北さん渾身の指導は受賞を逃したという。

受賞は一つの結果であり絶対的な評価であるとは限らない。我々が見る限り歌も含めて利用者の方に寄り添っていこうとする思いが伝わってきた。植垣さんも介護の熱心さをひしひしと感じた、と賞賛した。

ことわざ学習も一歩から

伊東 峻

「コトワザ学習」に邁進する伊東さんは、11月11日、12日に教室に植垣さん、向井さんを連続して招きコトワザ学習を展開してもらったという。

植垣さんは妖怪にまつわるコトワザからカップ、てんぐ、サルを登場させ「どんなプロでも失敗する」という展開。向井さんはコトワザの表と裏の意味論、そしてそれらを受けて自ら翌日の学校公開日にコトワザの授業を展開したという。先輩の薫陶を受けて授業は上々の仕上がりとか。伊東さんのキャラも保護者には好評だったようで今後の展開が楽しみである。

間とは何か

徳永忠雄

10月の例会で庄司先生が言われた「こちら主義からあちら主義へ」が頭から消えず自分なりに考察してみた。

いろいろひもといていくと庄司先生の大きな柱が成城で巡り会った柳田国男にあったということがわかる。（本文参照）

子供の思いを尊重した
柳田は不思議な存在
弧猿円随筆京都学派
人がましく見る
犬の文明
オオカミの身になる
今西錦司のもののみかた

三浦さんコトワザは私がやりたかった
柳田、単元の名前がどんどん出てくる
学問の力
柳田に対して先入観がなかった
良くこんな人出てきた。
こんな学問を造った
西洋の学問から体系作りをする
日本人の靈魂観
バタ臭くない
知識人は注目した
柳田本を読んだ
文章のつくり方を読んだ
『年中行事図説』
子供には子供のもののあわれがある
対象 間 立体化
ペーソス 祭りが終わったとき